D.Gray-man～The power that is hidden～

黒薔薇嬢黒羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｄ．Ｇｒａｙ－ｍａｎ～Ｔｈｅ　ｐｏｗｅｒ　ｔｈａｔ　ｉｓ　ｈｉｄｄｅｎ～

【Ｎコード】

Ｎ２５３１Ｗ

【作者名】

黒薔薇嬢黒羽

【あらすじ】

エクソシストが集う黒の教団。アクマを造り、アクマを率いる千年伯爵。イノセンスの争奪で青年と少女が巻き込まれる。

プロローグ（前書き）

Ｄ．Ｇｒａｙ－ｍａｎとオリキャラがシャイニングウインドの心剣とテイルズ技を使います。気になる方はどうぞご覧下さい。

プロローグ

―街はずれの森の中―
「くそっ！しつこいな…！」
「まだ追ってくるよ……。」
「こいつの力がそんなに欲しいのか！だが、こいつはあいつから頼まれているんだ。奪われる訳には…！！」
（すまないがこいつを守ってくれ。俺はこいつを巻き込みたくない。お前と一緒なら安心だ。）
（こいつを守れってお前はどうすんだよ！）
（俺はお前達を逃げ出す道を作る。頼む俺の妹を…。」
「ねぇ…どこに行くの…？」
「……っ！」
「何でお兄ちゃん一緒に来なかったの？」
「それは…」
「みつけましたヨ。お前たち早く捕まえなサイ。」
（早くこいつを保護してもらわないと！！）
青年と少女が走るので精一杯だった。
彼らが向かう所は……

プロローグ（後書き）

episode. 1へ

ｅｐｉｓｏｄｅ．１（前書き）

プロローグの続きはどんな展開になっているのでしょうか？
どうぞご覧ください。

episode.1

「シュレイア。今向かっている所は黒の教団だ。そこでお前を保護してもらう。」
「えっ？黒の教団ってアクマと戦っている集団の所？」
「そうだ。フュレイアが黒の教団に連絡してくれているはずだ。だから黒の教団に行くんだ。」
「何で私だけなの？お兄ちゃんとブレイラは教団に行かないの？」
シュレイアは低い声でブレイラに聞いた。
「俺は、行けない。あいつと約束したから。」
「お兄ちゃんとの約束って？」
「それは言えない。約束は人に言ったら約束じゃないからな。」
「ブレイラ…。」
「追い詰めマシタヨ。そのコをこちらに渡しナサイ。」
二人が話をしている時に二人の周りは敵に囲まれていた。
「断る！！俺はシュレイアを守る役目がある。貴様らに渡すわけにはいかないんだよ！！」
「お前一人でこの数の多さで勝てると思っているのデスカ？」
「シュレイア。今から結界を張る。その間動かないって約束できるか？」
「う、うん。でも、無理しないでね。」
「あぁ、俺の強さお前は知っているだろ？そんなに心配するなすぐ終わらせてくるからな。」
「うん。」
「さぁ、殺しナサイ！！そして、奪いナサイ。」
「うぉーーーーー！！」
「ぎゃーーー」
ブレイラはシュレイアの周りの敵と自分の所の敵を次々と撃破していた。

「ううむ、これは厄介デスネ。彼に協力して頂きマショウカ。出て来ナサイ。」
「何の用ですか。伯爵様。」
「仕事デスヨ。あの青年を殺しナサイ。少女を我輩の所に連れて来ナサイ。」
「了解しました。」
「何だ。こいつは！！」
「我輩の可愛いアクマちゃんデスヨ。さあ殺しナサイ。」
「くっ！！」
「人間、俺のエサになれ！！」
「ほざけ！！ならば貴様は無に帰れ！！」
「どこ狙っているんだ？俺を殺すんだろ～？？」
「くっ！！」
「俺を殺さないと伯爵様の所にあの女を連れて行くぜ～。」
「貴様みたいな穢れているアクマがシュレイアに触るな！！」
「ひひひ！あの女の方はどうかな？」
「！？」
「なかなか破れないなぁこのバリアー。面倒だなぁ…。ちょっと派手にやっちまうか？」
「…！な、何！？」
「伯爵様、このバリアー破壊するのに派手にやっちゃっても良いですか？」
「そのコを早く捕まえるならいいデショウ。ただし、傷つけないようにして下さいネ？」
「了解です。さぁ、派手にいきますよ。」シュレイアの周りを囲んでいるアクマ達は次々とシュレイアの守る結界を破壊し始めた。
「いゃ…！！」
「シュレイア！！」
「ブレイラ、後ろ！！」
「しまった！！」

「もう遅いよ？」
ブシャー！
「ぐはっ！」
「嫌ぁーーーーーー！ブレイラ！！」
「大丈夫…だ…。お前を一人には…。」
「しつこいよ？いい加減死ねよ？」
（フュレイア…。）
ドーン！
「何だ！？」
「何とか間に合った！！」
「あんたは…？」
「僕は黒の教団のアレン・ウォーカーです。あなたがブレイラさんですか？」
「そうだ…。助かった…。頼むあいつを…結界の中にいるやつを助けてくれ…。」
「大丈夫です。もう一人僕の仲間がそっちに向かっています。」
「すまねぇ…。」
「何だお前邪魔するな！」
「…イノセンス発動！！」
「お前はエクソシストか！！」
「哀れなアクマに魂の救済を！！」
「ぎゃー！！」
ブレイラで倒せなかったアクマを一瞬にしてアレンという少年は撃破した。
「おのれエクソシスト。毎回我輩の邪魔ばかり…。」
「千年伯爵！！」
「今日は引き上げることにシマス。我輩たちはその少女が我輩の所に来るまでずっと追いかけている事を忘れてはいけませんヨ。」
「待て！！」
「アレンくん！！」

「リナリー。そっちは大丈夫だった？」
「えぇ。何とか間に合ったわ。彼女を保護したわ。」
「彼女が依頼人からの保護対象の子よ。」
「ブレイラは！？」
「シュレイア…か…？」
「ブレイラ！！傷口が…！？」
「もう…これから俺は…お前守る事が…出来なくなってしまった…。」
「喋っちゃ駄目！！傷口が開いちゃう！！」
「いいんだ。俺はもう長くない…。」
「…嫌だ…！お兄ちゃんにブレイラまでいなくなったら私一人になっちゃうよ！」
「泣くな。フュレイアにシュレイアの事任されているのに俺がちゃんと約束守れなかったらアイツに会わす顔がねぇ…。」
「約束って？」
「シュレイアを教団に保護、そしてシュレイアを教団の者に保護してもらうまで守り抜くこと…。」
「そんな…。私を守るためって…。まさかお兄ちゃんは私を助けるために一人残ったの！？」
「そうだ。アイツは自分の命よりお前を巻き込みたくないというアイツの願いを俺は受け入れた。俺だって嫌だった。だが、アイツは可愛い妹を穢れた世界に巻き込みたくないって言ったんだ。だから俺はアイツには色々借りがあったからな断るわけにはいかなかった。アイツの気持ちを受け入れてやってくれ…。」
「そんなの勝手すぎるよ…。私だけ助かっても昔みたいに三人でいることができなくなるよ…。」
「心配するな…。俺とフュレイアはいつまでも……お前の……そばに……。」
「ブレイラ？ねぇ、ブレイラ！！ブレイラ目を開けて！！」
「シュレイアさん！！」

「ブレイラ、ブレイラーーーーー！！」
シュレイアは兄の次に敵から逃げている最中で兄の親友である、ブレイラまで失ってしまった。あまりにも自分の身内、友人を失ってしまうことがどれだけショックだったことかアレン達はそんな人達を今まで任務の中でたくさん見てきた。でも、これほど残酷なものはアレン達は今まで見たことが無かった…。

ｅｐｉｓｏｄｅ．１（後書き）

自分の身内、友人を失ったシュレイアはどうなるのでしょうか？

ｅｐｉｓｏｄｅ．２へ

episode. 2

「シュレイアさん…。」
「っ！！」
「何をするつもりですか？」
「もう私の周りは頼れる人がいなくなってしまった…。お兄ちゃんがもういない、ブレイラもいない世界なんて生きる希望が無くないわ。だからここで一緒に死んで…。」
「貴方はブレイラさんの最後聴いていなかったのですか！？お兄さんは貴方を巻き込みたくなかったから自分の命より貴方を選んだんですよ！！それは貴方が生き延びて欲しいというお兄さんの願いじゃないんですか？」
「命より私を選ぶなんて命を粗末しているみたいなものじゃない！！」
「それは違います！！貴方はお兄さんと共に過ごしてきたのなら貴方の目はお兄さんがどういう風に見ていたのですか？お兄さんと暮らしてきた日々を否定している事なんですよ！！」
「…！？」
アレンの一言でシュレイアは驚いて目を大きく開いた。
「…お兄ちゃん。…ブレイラ。」
シュレイアの脚元がふらふらしてシュレイアの体力の限界でとうとう倒れてしまった。
「シュレイアさん！！」
アレンとリナリー達の声が聞こえるが、意識が遠のくにつれて小さくなっていった…。
（シュレイア。俺にとって可愛い大切な妹よ。）
（お兄ちゃん！！）
（シュレイア。アイツの気持ち分かってくれこれはアイツと俺からの願いだ。）

（ブレイラ！！待って！二人共行かないで…！！）
「…かないで。」
「シュレイアさん。」
「うっ。ここは…？」
「ここは黒の教団本部です。貴方はあの時気を失っていたんですよ。僕がここまで運んできました。あと貴方の友人の遺体はこちらで埋葬しましたので。あとで墓まで案内しますね。」
「ブレイラ。やっぱり死んでしまったの…？」
「僕達がもう少し早く貴方達の所に着いていたらこんな事には…。」
「……」
「すみません。」
「もういいんです。お兄ちゃんとブレイラから守ってもらった命です。この命を大切にします。」
「シュレイアさん。」
「あっ。シュレイアで構いません。私もアレンって呼ばせていただきます。もう一人のお仲間さんはどこですか？お礼がしたくて…。」
「分かりました。僕が案内します。」
「すみません。」
「体の方は大丈夫？」
「はい。休ませていただいたおかげでだいぶ楽になりました。」
「それは良かった…。」
シュレイアはどうしてこの少年はこんなに優しいのだろうと思った。見た目は自分より年下なのにしっかりしている。その時自分とアレンを何故か比べてしまった。
「たぶんこの時間なら食堂にいると思いますよ？」
「食堂ですか？この教団には食堂があるんですか？」
「はい、もしかして食堂は初めてですか？」
「は、はい。恥ずかしながら食堂というものに縁がないので…」
「そうなんですか。食堂だとみんなと一緒にご飯を食べて、お話をしたりしますよ。」

「へぇ…。」
ー食堂ー
「ここが食堂です。」
「広い食堂ですね。」
「あっ。リナリー。やっぱり食堂にいましたね。」
「あ、アレン君。アレン君もご飯？」
「それもそうなんですが、シュレイアさんがリナリーにお礼が言いたいって。」
「シュレイアさん、体の方は大丈夫なの？」
「大丈夫です。先日は私を助けて頂きありがとうございました。二人が駆け付けてくれなければ私はここにたどり着く事ができませんでした。お二人には感謝しています。」
「貴方に怪我がなくて良かったわ。アレン君、今からシュレイアさんのお兄さんの友人さんのブレイラさんのお墓に今から行くの？」
「はい、シュレイアさんが眠っていた時から2日経ってしまいましたからね。」
「2日も眠っていたんだ…。」
「ちゃんと自己紹介できていなかったわね。私はリナリー・リーよろしくね。」
「こちらこそよろしくお願いします。」
「そういえば兄さんがシュレイアさんが目が覚めた時はアレンくんとシュレイアさんと私の3人は室長室に来て欲しいって言われたの。」
「コムイさんが？分かりました。シュレイアさん、リナリー行きましょう。」
アレン達は室長室に向かった。
ー室長室ー
コンコン
「アレンです。コムイさん、いますか？」
……。

「返事がないわね。いないのかしら？コムイ兄さん入るわよ？」
「誰もいませんね…。」
「どこにいったのかしら？コムイ兄さんいないの～？」
「リナリ～～～～～！！助けて！！リーバー班長が僕を苛めるよ～～～～！！」
「それは兄さんが仕事しないからでしょう！？」
「リナリー、室長を何とか仕事するようにしてくれないか？でないと仕事が貯まって終わらない一方なんだ…。」
「兄さん仕事しないと私結婚するわよ。」
リナリーの言葉からシュレイアはまさかそんな事いうとは思わず、一番驚いたのはコムイ室長の顔だった！！
「リ、リナリーが結婚！？そんなの嫌だーーーーーーーー！！」
「そうですよ室長。だったらリナリーちゃんに結婚して欲しくないなら仕事して下さいよ！！」
「仕事も嫌だけど、リナリーが結婚するのはもっと嫌だーーーーーーーー！！」
「もういつまでもだだこねてないで兄さん。」
「ヤダヤダ！！お兄ちゃんは認めないぞ！！」
「ちゃんと仕事してくれたら結婚しないから。」
「本当？」
「兄さん。私今まで兄さんに嘘ついたことある？」
「分かった。お兄ちゃん仕事するよ！！」
（切替早ッ！！）
「ところで兄さん私達に何か用があるんじゃないの？」
「そうだった。アレンくん彼女が依頼人の対象の人かい？」
「はい。」
「初めましてシュレイアさん。僕はこの教団本部室長コムイ・リーです。」
「初めましてシュレイア・フローアンといいます。助けて頂きありがとうございました。」

「依頼人は確か…」
「フュレイア・フローアンではないですか？」
「そうだよ。君のお兄さんだというのはアレンくんに聞いたよ。君のお兄さんから依頼書と一緒に君宛の手紙も預かっているよ。」
「お兄ちゃんからの手紙？」
「どうして君を教団にかその事も書いてあるよ。」
シュレイアはフュレイアからの手紙を恐る恐る開けた…。

ｅｐｉｓｏｄｅ．２（後書き）

シュレイアのお兄さんが書いた手紙の内容とはいったい何だったんでしょう？

ｅｐｉｓｏｄｅ．３へ

episode. 3

―Ｄｅａｒシュレイアへ―
こんな形でお前に直接話が出来なくて本当にすまない…。
これだけは分かって欲しい！！俺はお前の事が嫌いで教団に行かせたんじゃない。お前の事が一番大切な家族でたった一人の妹だからだ。お前の力を利用しようとしている者がいる。だから危険性があるからブレイラにお前の護衛を頼んだんだ。シュレイア、お前の力を使う時はお前の心を許した者だけ力を使うんだ。

俺の可愛い妹シュレイア、愛してるよ。

ｆｒｏｍフュレイア・フローアン

シュレイアはフュレイアの手紙を閉じた。シュレイアの涙が頬を伝っていき、リナリーは静かにシュレイアを抱きしめた。
「お兄ちゃん、私もだよ……。」
「シュレイア…。」
「シュレイアさん。我々の力が及ばず申し訳ございません。」
「いいんです。私の為に二人が守ってくれたこの命を大切にします。」

「早速ですが、シュレイアさん貴方が狙われているという事は何かすごい力をお持ちですか？そうじゃないとアクマに狙われるという事はないですからね。」
「私が狙われる理由は…。普通の人達と違う力を持っています。」
「もしかしてイノセンス！？」
「いえ、イノセンスではないです。私は“魔術”と“心剣”が使えるんです。」
「魔術と心剣？どういうものなの？」
「魔術はいわゆる魔法と同じなのです。心剣とは女性の心が結晶化して剣となって武器になるのです。」
「心が武器？」
「僕がやってみても構わないかいシュレイアさん？」
「はい。」
コムイとシュレイアがお互い向きあってコムイは右手をシュレイアの胸の位置にもっていき、二人は静かに集中した。
「久々だからあの時の形かな…？」
「さぁ？どうなんでしょうね。」
二人はそんな会話をしていたが、シュレイアの胸の辺りから何か文字がたくさん書いてある丸い陣が出てきた。
「アレンくん、リナリー、この陣は心剣を抜く時に出てくる陣だよ。この陣が無いと心剣は抜けないよ。シュレイア心剣抜くよ。」
「うん。いいよ。」
シュレイアの胸の辺りから剣が出てきた。コムイはそして剣を抜いた。コムイが抜いた剣は刀身が日本の国でいう刀に等しい剣で太陽のような暖かみで少し赤に近いオレンジ色の剣だった。
「あれが心剣…？」
「僕の心剣は人を斬るのではなく、力を与える剣なんだ。試しにアレンくんやってみるかい？」
「は、はい。」
「僕の前に来てそのまま立っててくれるかい？」

「僕は何もしなくても良いんですか？」
「何もしなくてもいいよ。」
コムイに言われた通りにアレンは何もしないでただ立っていた。
「我の力をこの者に。」
コムイが唱えた言葉にアレンの足下に陣が浮かび上がってきた。
「これは凄いです！！力がどんどん湧いてきます！！」
「本当に！？」
「私の心剣は本物です。心剣の形は人によって全く形も能力も違います。ただし、心剣を抜く事が出来るのは男性だけなのです。」
「僕がシュレイアの心剣を抜く事が出来るの！？」
「はい。でも、今は心剣を抜く事は出来ないと思います。」
「どうして？」
「私は貴方の事よく知らないし、信頼度と私の事知らないと抜く事が出来ないわ。」
「そう。確かにいきなり彼女の心剣を抜こうとすると彼女自身の心剣が抵抗して抜く人にダメージがくるからね。それは彼女自身の心にもダメージが一番大きくくるからむやみに心剣を抜く事はいけないよ。」
「分かりました。話はまだありますか？」
「うん。今さっき新しい任務が入ってきたばかりだよ。街にアクマが出たそうだ。至急アクマを破壊して欲しい。」
「アクマ…？」
「シュレイアさんはアクマの事知っていますか？」
「アクマの事は少しだけお兄ちゃんから聴きました。人を殺す兵器だって…。」
「アクマは人の皮を被って人の世界に入り込んできます。アクマの源は人間の魂です。製造者が蘇らせて欲しい人間のもとに現れて製造者と契約すると同時にその人は蘇った魂に殺されてしまい、蘇った魂が殺した人の皮を被って人を殺すしかない兵器になってしまうのです。」

シュレイアはその話を聴いて顔が真っ青になって床にへたり込んだ。
「アクマが人の魂で人を殺しているってそれじゃあ人間同士の殺し合いじゃない…！！そんなの悲しすぎるよ！！」
「これは真実なんです。シュレイア…。」「僕たちはその人達を助けるためにエクソシストになったんです。悲しみを増やさないために。」
アレン達の目は嘘偽りはなく、何かを決意しているそんな目をしていた。
「私も…。私も一緒に戦います！！」
「シュレイア！？貴方を戦わせるなんてそんな事出来ません！」
「どうして…？どうして駄目なの？人を助けるために戦うことはいけないことなの？」
「そうではありません。貴方はアクマ達から狙われているんです。その貴方が敵の手に捕らわれる可能性があるという事をアレンくんはそう言いたいんです。」
「私はもう守ってもらうばかりは嫌なの。守ってもらってばかりじゃいられないの！！また誰かを失うのはもう嫌なの！！」
シュレイアの目から今にも涙がこぼれ落ちそうな顔だった。
「確かに人助けするために僕らがいるんです。僕らも彼らと同じ人間です、僕達エクソシストも仲間を助け合って戦っているんです。コムイさん、シュレイアの言葉を信じてもいいんじゃないですか？」
「アレンくん、これはシュレイアのお兄さんの願いでもあるんだよ。」
「でも、シュレイアはずっと守られてばかりだと彼女は同じ事を繰り返して苦しむだけですよ。だから、シュレイアを戦う事を認めてあげて下さい。」
アレンはコムイに頭を下げた。
「ア、アレンくん…。」
「兄さん私からもお願い。このままだとシュレイアがあまりにも可哀想だわ…。」

「と言ってもなぁ…。」
「じゃあ僕らがそばにいるのはどうですか？任務の時は一緒にいて、生活面はリナリーやミランダに協力してもらうのは駄目ですか？」
「それなら兄さんも構わない？」
「二人がそう言うなら僕は止めないよ。じゃあ二人ともシュレイアの事頼んだよ。」
「「はい！」」
「今回の任務はアクマ退治だけど、シュレイアも一緒に同行だけど構わないかい？」
「私は構いません。多くの人が助かるなら私行きます！！」
「３人共気をつけて。」
３人はコムイの話を聴いてから室長室をあとにし、任務の場所へ向かうのであった……。

ｅｐｉｓｏｄｅ．３（後書き）

心剣の事とシュレイアの事を少し出しましたがいかがでしたか？次話からＤグレキャラを少しずつ出していきたいと思います。

ｅｐｉｓｏｄｅ．４へ

episode. 4

コムイ室長の所に新しい任務が届いてシュレイアとアレンとリナリーはその任務を受けることにした。任務はフランスの小さな村にアクマ退治をすることであるが、アレン達はまだ目的地に向かう途中であった。

―フランス―

「ここが任務の場所ですか？」

シュレイアはアレン、リナリーと共に任務にフランスへ来た。シュレイアの問いかけに二人は応えた。

「そうですよ。ここが今回の任務の場所です。」

「見た感じは普通の村だけどね。」

シュレイアから見ても確かに普通の小さな村で村の人も普通に生活をしている。特に変わった感じがしなかった。

「シュレイアは普通に見えると思いますが、僕はアクマと人を見分けることが出来るので大丈夫です。」

アレンの左目の話は少しコムイ室長から聴いていたが、シュレイアはアクマが見えるというのがどういうものなのかシュレイア自身実感がなかった。

「シュレイア？」

「えっ…？ご、ごめんなさい。少しボーとしていました。」

「村の人から情報を聞きましょう。何か分かるかも知れないし。」

アレンとシュレイアは頷いた。

「すみません。ここ何日か変わったことありますか？」

早速アレン達は一人の村の人に声をかけて聞いてみた。

「変わったこと？あぁ、この村の宝剣が急に光を放っていてそれと同時に変な怪物が現れるようになりましたね。」

村の人が言った怪物という言葉でアレン達はアクマだと確信した。

「その宝剣はどこにありますか？」

「村の教会に厳重に保管されています。」

村の人に宝剣が保管されている教会ある場所を聞き、三人は教会の方へ向かった。

教会に着いた三人は違和感を感じた。特にシュレイアは一番早く村の空気が違うことに気づいた。

ー教会ー

「この中にその宝剣があるんですね。」

「はい。どうぞお入り下さい。」

三人は教会の中に入った。教会の中はどこにもある教会とほとんど変わらない。中に入って通路の先の奥に村の人が言っている宝剣が飾ってあった。三人は宝剣の近づき、宝剣は確かに光を放っていた。

「これが宝剣ですか…？綺麗な光を放ってますね。」

「シュレイア、綺麗な光ってどうして分かるの？」

リナリーはシュレイアに問いかけた。

「…？透明で一点の汚れがない光ですけど、見えますか？」

「私は同じ光に見えるわ。」

「ずっと光続いているんですか？」

「はい。どうしてなのか俺達には分からないんです。」

アレン達は原因は何なのかと考えるともしかしたらイノセンスが頭の中に出てきた。それならアクマが出現するのが納得いくとアレン達は思った。

「リナリー、この宝剣ってもしかして。」

「アレンくん、私もアレンくんと同じことを考えていた。」

二人が話をしている間にシュレイアは宝剣に手を伸ばした。すると宝剣がさらに光がまぶしいくらいに光を放った。

「シュレイア！！」

「何だろう。何でこの光が懐かしく感じる…。」

宝剣から放っていた光は小さな光の塊となり、その光は輝きを保ってシュレイアの前で浮いていた。その光にシュレイアは手を伸ばした。

「おいで…。」

シュレイアの一言にその光が反応し、シュレイアの所に光が移動した。その光はシュレイアの身体に吸い込まれていった。

「っ！」

シュレイアの身体に少し痛みがあり、その痛みを受け止めた。

「シュレイア、大丈夫！？」

「うん、大丈夫…。」

「顔色があまり良くないです。早く宿で休ませてあげないと。」

アレンとリナリーはどうしてシュレイアの身体の中にあの光が入ったのか疑問だった。このことは教団に戻ってから話をしようと二人は思った。

―宿屋―

「シュレイア気分どう？」

少しベッドで横になっているシュレイアにリナリーは様子を伺っていた。

「うん。教会にいた時より楽になったよ…。ごめんなさい私のせいで早く教団に戻れるはずだったのに…。」

「気にしないで下さい。任務完了しましたし教団に帰る前に寄り道も必要ですよ。」

「そうね。たまには息抜きも必要ね。村を出たらシュレイア街でお買い物しましょ？」

「お買い物ですか…？」

「うん。最近買い物していなかったし、ちょうどいいかなって思って。」

リナリーは最近シュレイアが元気がない事を気にしていた。気にしていたのがリナリーだけではなかった。コムイとアレンもシュレイアの事を気にしていたのだった。息抜きの提案をしたのはコムイだった。

「うん。お買い物に行きたいです。」

「じゃあまずはゆっくり休まないとね。」

「そうですね。」

シュレイアはそう言って再び眠りについた。

「アレンくんちょっといいかな。」

「はい。」

アレンとリナリーはシュレイアのいる部屋から出て、違う部屋に二人は入った。

「シュレイアの事なんだけど、教会にいた時で宝剣の放っていた光をシュレイアは身体に入っていたのが気になってあれは何だったのかなって…。」

「あの光はシュレイアに反応していましたね。シュレイアと何か関係があるんじゃないですか？」

「一度兄さんに聞いてみないと分からないわね。」

二人が話をしている時にリナリーのゴーレムから通信が入ってきた。

「任務の方とシュレイアはどうだい？」

「任務は終わったわ。少し兄さんに聞きたいことがあるんだけど？」

リナリーはコムイに任務で起きたこと、シュレイアのことを話している間にアレンはシュレイアの様子をリナリーに伝えてシュレイアのいる部屋へ向かった。

「あの光はどうして私の身体の中に…。」

シュレイアはふと思っているときに扉が開いた。

「シュレイア、起こしてしまいましたか？」

「ううん。なかなか寝付けなかっただけだよ。どうしたの？」

「今リナリーは通信ゴーレムでコムイさんとお話して長くなりそうなので。」

「そうだったんだ。」

シュレイアは身体を起こした。
アレンはシュレイアのもとに近づいていった。

「まだゆっくりしてて下さい。」

「なんか寝てばかりだと変になってしまうから少しでも身体動かしておかないと。激しい運動はしないから散歩だけでもいいからお願い。」

「分かりました。散歩だけですよ。」

「ありがとうアレン。」

シュレイアはベッドから出て、服の着替えを探し着替えるためアレンは部屋を出た。数分経ってから部屋からシュレイアが出てきて、タイミング良くリナリーと合流して三人で街に出かけたのであった。

―街―

「この服どう?」

「とても可愛いです。リナリー似合っています。」

リナリーとシュレイアは新しい服が欲しいと言っていたので服を見ていた。アレンはお店の前に待っていた。

「シュレイアはこんなのはどう？」

リナリーが見ている服はレースがついていた黒いスカートで丈はリナリーと同じくらいの長さでロングブーツが飾ってあった。

「可愛い…。」

「すみません！このスカートとブーツ下さい！！」

「リ、リナリー！？」

「こういうのは早く決めて買う方が良いわよ。あとで買うと思っても無くなってたりしたら後悔するから。」

リナリーの突然の行動にシュレイアは驚いた。

「シュレイア、これは私からのプレゼントよ。」

「私がもらっていいの？」

「うん。シュレイアにプレゼントしたものだし。せっかくだから着てみたらどう？」

「うん。」

シュレイアはリナリーからのプレゼントをさっそく着てみることにした。

「アレンくんお待たせ。」

「何か良いものありましたか？」

「えぇ。」

「シュレイアは？」

アレンはリナリーと一緒にいたはずのシュレイアのいないことに気づく。

「シュレイアはあそこよ。」

シュレイアは建物の横からアレン達を見ていた。アレンは首を傾げた。

「シュレイア！どうしたんですか？」

「……こんなの恥ずかしいよ……。」

リナリーとアレンはシュレイアのそばに近づいた。シュレイアはその場を動こうとはしなかった。

「シュレイア。私が見立てたんだから大丈夫よ。似合っていたんだから恥ずかしがらないで出てきて。」

「でも……」

シュレイアは恥ずかしがっていたが、リナリーはシュレイアを引っ張り出した。

「……変かな……？」

アレンはシュレイアの初々しさと服装を見て少しドキッとした。

「とても似合っていますよ。」

アレンがニコッと笑顔をしたらシュレイアの顔が真っ赤になっていた。

「そろそろ教団に戻りますか？」

「うん。」

シュレイアにとって初任務は無事完了と買い物を済ませた。アレン達は荷物をまとめ、教団へ帰還するのであった……。

―教団―

「私兄さんの所に報告に行くからアレンくんとシュレイアは食堂に行ってみたらどうかしら？丁度お昼だし。」

「そうですね。シュレイア食堂に行きますか？」

「うん。」

「それじゃあまた後でね。」

アレンとシュレイアはリナリーと別れ、食堂に向かった。

アレンとシュレイアは食堂に着いた。食堂は大勢でエクソシストとエクソシスト達をサポートするファインダー達が食事をしていた。

「すみませーん。みたらし団子２０本下さい！！」

「２０本も食べるんですか？」

「はい。僕は他の人達と違ってかなり食べますよ。これだけでも足りないくらいです。」

シュレイアはみたらし団子２０本出てきたのを見てみたらし団子を食べる勢いに驚いた。

「シュレイアは何も頼まないんですか？」

「私はさっき頼みました。そろそろ来ると思いますけど。」

シュレイアが言っていた時にシュレイアが注文していたものが届いた。シュレイアが注文していたものはチョコレートケーキのセットだった。

「ケーキですか。いいですね。」

「今ケーキが食べたい気分だったので…。」

「あれ？アレンいつ戻ってきたん？」

シュレイアの背後に立っていた青年は赤髪に右目に眼帯をしておで

こにバンダナをしていた。

「ラビ、さっき戻ってきたばかりですよ。今シュレイアと食事しているんです。」

「初めましてシュレイアといいます。貴方は？」

「俺はラビよろしくな。この子がコムイが言っていた子？」

「そうです。ラビも任務終わったんですか？」

「あぁ。俺も飯にしようと思って食堂に来たんさ。」

ラビはシュレイアの横に座ってシュレイアをじっと見ていた。シュレイアはそれにまったく気づかない。

「……可愛い。」

「あの何か言いましたか？」

「何でもないさ。シュレイアとアレンはこの後はどうするんさ？任務ないんだろ。」

「コムイさんの呼び出しが来るまでは任務は無いですね。この後は特に予定考えていませんし。」

アレンのしゃべっていることをシュレイアはコクコクと頷いていた。

「そうか。リナリーはコムイとこ？」

「任務の報告に行きましたよ。」

「なら今暇ならゲームしようさ。」

「ゲームですか？」

ラビの提案でアレンとシュレイアの三人はゲームをすることになった。

ラビがポケットの中から取り出したのはトランプだった。

「ババ抜きはどうよ？」

「ババ抜きやりたいです。」

「じゃあババ抜きで、罰ゲームありにする？」

「そんなこと言われるとありにしないと面白くないじゃないですか！？」

罰ゲームありのババ抜きが始まった。ラビがよくきって三人分に分けてそれぞれ自分のカードを持った。同じカードを抜いていき三人は準備が整ったのでババ抜きが始まった。

「ところでラビ、罰ゲームは何にするんですか？」

「負けたやつは一番早く上がったやつの言うことを何でも聞く一週間で任務中でもありっていうのはどうさ？」

「僕は構いませんよ。」

「私もいいよ。」

「じゃあ俺からアレンのカードを引き始めるさ。」

ラビはアレンのカードを引き、アレンはシュレイアのカードを引き、シュレイアはラビのカードを引くという順番で引いていった。

「あっ。ありました！！」

「俺もあったさ。」

「私全然減らない…。運が無いのかな…？」

アレンとラビは減っていく一方シュレイアはあまり減らなかった。

「これで最後のカードさ。俺の欲しいカードはアレンが持っているのか、シュレイアが持っているのかで決まるさ。」

「簡単には上がらせませんよ。」

ラビとアレンはいくらトランプといえども目が本気だった。シュレイアは二人の間に少し間をおいた。

「これだーーーー！！」

ラビがとったカードはハートのエース持っているカードはスペードのエースだった。

「あがりさ。」

「僕もあと一枚ですがこれを引いて、僕もあがりです。」

ババ抜きの結果シュレイアが負けて、一番最初に勝ったのはラビだった。

「私は何をしたらいいの？」

「そうだなぁ～。コスプレしてもらおうかな？」

「どんな服を着たらいいんですか…。」

ラビはニコニコしながら先ほど持ってきていた荷物から服を取り出した。

「この服着てきて。」

そう言われて手にした服は広げてみるとフリフリのメイド服やら派手な服ばかりだった。

「ラビこの服は？」

「リナリーから頼まれたてこれ全部シュレイアの服だってさ～。」

シュレイアは全ての服を見てあまりの派手さで驚いた。

罰ゲームだからシュレイアの選んだ服は黒いレースの多いメイド服。

シュレイアは服を選んだら着替えに向かって数分後にシュレイアとリナリーが戻ってきた。

「……可愛い過ぎ……」

「……！！」

あまりにもシュレイアが似合いすぎて二人は言葉が詰まってしまった。

「……着てきたよ……。」

「シュレイアが私の所に来たからびっくりしたわ。話をしていた兄さんもシュレイアの持っていた服を見てかなり驚いていたわよ。」

「ババ抜きで俺が勝ってシュレイアが負けたから罰ゲームであの服を着たんさ。」

「リナリーは何か用事があったんですか？」

「次の任務のことよ。アレンくんとラビとシュレイア、私の四人ですって。」

リナリーは自分の持っている資料を出してアレン、ラビ、シュレイアに見せた。資料の写真のものがシュレイアは気になっていた。

「これは…？」

「綺麗な華ですね。これがどうしたんですか？」

「この華を回収して欲しいということよ。そんなに遠くない場所に目的の華があるそうよ。」

「俺もこんな華見たことないさ。」

「この任務を受けますが、いつ出発ですか？」

「今日よ。だから荷物をまとめて準備してね。あとでここで待ち合わせしましょ？」

「そうですね。ではまたあとで。」

アレン達は新たな任務の向かうためにそれぞれ自分の部屋へ戻り準備をするのであった。

ｅｐｉｓｏｄｅ．４（後書き）

Ｄグレキャラは今回ラビを出してみましたが、いかがでしたか？

次話は神田を出そうかなと思っています。

あとはそろそろ初心剣を発動するところを書く予定です。

それではまたお会いしましょう。

ｅｐｉｓｏｄｅ．５へ

episode.5

今回の任務は前回のメンバーにラビが加わって行動することになった。

シュレイアは荷物をまとめ終えて入り口でみんなと合流し任務場所へ向かった。

任務場所は電車が無いと行けない場所で電車に乗った。シュレイアは窓際に座って外の景色を見ていた、隣にリナリーが座った。

山と小さな川で囲まれていて、山は緑がたくさんあり、川には小さな魚がたくさん泳いでおり、村の人が水遊びをしている姿をシュレイアはずっと見ていた。

「綺麗な所ですね。」

「そうね。こんな所に争いごとは持ち込みたくなかったんだけどね…。」

リナリーはシュレイアにそういった。確かにこんな豊かで綺麗な所にこれから争いごとになるかもしれないのにシュレイアとリナリーは罪悪感があった。

「そうなる前に僕たちがやるんです。」

「そうさ。俺たちがやれば大事にならなくて済むんだからさ二人とも元気出すさ。」

アレンとラビは二人を励ました。二人は少しずつ元気を取り戻した。

シュレイアは外を見ていた。こんな綺麗な景色で豊かな所をシュレイアにとって初めて見た景色だった。

自分が住んでいた街は家ばかりだった。

でもここは違った空気や景色が自分の住んでいた街と比べてみたらこんなに違うということがこの目ではっきり分かった。

「もうすぐ任務場所ですよ。」

電車は任務場所近くの駅に到着した。

シュレイア達が着いた任務場所は緑がたくさん囲まれている小さな街だった。シュレイアはぐるっとまわっても緑ばかりと建物だけだった。

「この街にいると落ち着く…。」

「任務の内容を改めて確認するわ。目的はこの街のどこかに目的の華があるからそれを見つけて持ち帰ることよ。」

「こんな街に本当に華があるのさ?」

「まずは情報集めをしましょう。今は1人で動くより2人で動く方がいいと思います。」

「じゃあ俺はシュレイアと行動するさ。罰ゲームの事もあるし。あんな服しているとシュレイアに“悪い虫”がつかないようにしないと。」

「じゃラビお願いできる？」

「任せてくれさ。ということでよろしくなシュレイア。」

「よろしくお願いします。」

ラビとシュレイア、アレンとリナリーというペアで華の情報を集めることになった。

―誰か僕の声聴こえる人いないの？―

「えっ？何か聴こえたような…。」

―僕の声が聴こえるの？―

「声が聴こえる…。」

「シュレイア？どうしたんさ？」

シュレイアは声が聴こえる方へ走り始めた。その走るシュレイアのあとをラビは追いかけていた。

「おい。シュレイア待つさ！！いったいどうしたんさ！？」

―こっちだよ―

シュレイアは声が聴こえる方へ脚を止めることもなく走り続けた。だんだん先に行くにつれて暗くなっていた時に一点の小さな明かりが見えた。

「あれは何…？」

シュレイアが明かりが見えた所に着いた。明かりの正体は任務の目的である華であった。

「この華は…！？」

―僕の声が聴こえる君は何か特別な力があるんだね。僕の声は普通の人には聴こえないからね。ここまで来てくれてありがとう。君の名前を教えてくれる？―

「シュレイア。貴方の名前も聞かせてくれますか？」

―僕は、カファ。ここに来たと言うことは僕の力が必要だということだね―

「カファ。決して悪いことしないからお願い！！力を貸してくれますか？」

シュレイアはカファに力を貸してくれるようにお願いした。

―いいよ。君の力になるよ―

「ありがとうカファ。」

「シュレイア！！」

シュレイアの後ろからラビの声が聞こえてきて振り返るとラビが息を切らしながら一息ついてから喋り始めた。

「その華！？見つけたんだな。」

「うん。ラビこの華から声聴こえる？」

「はぁ？俺全然聞こえないさ？シュレイアはその華が喋っている声が聴こえるのか？」

「うん。ラビが来るまで喋っていたの。」

ーまったく失礼なやつだなー

「仕方ないよ。聴こえていないんだから。」

普通の人から見ている姿ならシュレイアは独り言をしているもしくは変な人だと思われてもおかしくないと思っているラビだったが、本人の前では言わなかった。

「ラビ、これで任務完了だよね？」

「そうさ、早くアレン達に伝えておかないと何が起こるか分からないさ。」

シュレイアとラビは元の来た道を辿りながら街に帰るのであった。

「あっ！シュレイア、ラビどこに行っていたんですか！？待ち合わせた時間になってもこないので心配しましたよ。」

「ごめんごめん。シュレイアが俺には聴こえない声の主まで行っていたんさ。」

「シュレイア、何かあったんですか？」

シュレイアはアレンとリナリーに華のことと声の主のことを全て話した。

「そんなことがあったんですか。」

「とりあえずこの華を教団まで持ち帰らないと行けないわ。兄さんに連絡してみるわ。」

―シュレイア、この人達は？―

「エクソシストだよ。アクマを退治する専門の人達だよ。」

―エクソシスト、シュレイア君もエクソシストなの？―

「ううん。私はアクマから逃げているところをこの人達に助けてもらったの。でも、私この人達とはまた違う力を持っているの。」

―だから君とこうして話ができるのはその力のおかげかな？―

シュレイアは自分自身の事をカファに話していた。

「華が話していることが分かったらいいなぁ…。」

「そうですね。」

―僕とお話したいの？―

「うん。そうみたいだよ。」

ーちょっと待ってて。話ができる姿になるよー

そう言って華から小さな光が放たれ、華から小さな全身紫色のドラゴンのぬいぐるみに変わった。

「これなら話ができるよ。」

「ぬいぐるみが喋った！？」

「僕カファ。シュレイアについて行くからこれからよろしく。」

「可愛いぬいぐるみの割に偉そうだな。」

「……可愛い……」

華からぬいぐるみに変わったカファはシュレイアの肩にちょこんと座った。

「シュレイアから良い匂いがする。この匂い僕好き。」

カファはシュレイアの顔にスリスリと擦り付けていた。

「カファ。どんな匂いなの？」

「うーんとね、甘い香りがするんだ。普通の人間だと分かんないんだろうね～。」

リナリーはシュレイアの匂いを嗅いで確認したが、甘い香りがしなかった。

「早く教団に帰りましょ。」

任務をとりあえず完了したシュレイア達は教団本部に戻る途中でアレン達と同じ服を着た一人の青年が歩いていた。

「あれ神田じゃない？」

「本当さ。呼んでみっか、ユウ～。」

神田という青年がラビの声が聞こえたようでこっちを見たが、そのまま駅の方へ行ってしまった。

「ユウ待つさ～。」

「あの人は？」

「彼は神田、私達と同じエクソシストよ。」

ラビは神田に追いかけて追いついたが神田はかなり不機嫌だった。

「ユウ何で無視するんさ？」

「うるさい。その名で呼ぶな！！」

「相変わらず機嫌が悪いさ。」

「黙れ、刻むぞ！」

神田は刀を抜いてラビに突きつけた。

「何しているんですか！！」

シュレイアは刀を抜いた事で思わずラビの所に走った。

「何で貴方は仲間に刀を突きつけるんですか！？」

「なんだこの女は？エクソシストじゃない奴に関係ない。」

「関係なくないです！！エクソシストじゃなくても普通なら刀を突きつけたりなんてしません！！」

神田の行動で怒っているシュレイアにラビはシュレイアの頭を撫でた。

「シュレイア俺全然大丈夫さ。優しいなシュレイア。」

「シュレイア撫で撫でされてる～。しかも、ラビ君さりげなくシュレイアにくっついているね～。」

「そ、そんな事してないさ！」

「ラビそうなの…？」

シュレイアはカファの言葉に戸惑った。一方ラビは恥ずかしさのあまりに顔が少し赤くなった。

「ラビ君変態～！！」

「黙って聴いていたが流石に俺怒るさ！！」

「わぁ～。ラビ君が怒った～！！」

ラビがカファにキレそうになるところをシュレイアが止めに入ろうとしたが、アレンが止めに入った。

「ラビ、落ち着いて下さい。」

「ラビ君何でシュレイアに優しくて僕には優しくないの！？酷いよ、差別だよ！」

カファはぶーぶーとラビに文句を言った。

「ラビ、カファはね遊んで欲しかったし、構ってもらいたかったの。だから許してあげて…。」

「俺は、いいさ。」

「カファ、ラビに謝って？」

「ラビ君ごめんね～！」

カファはシュレイアの言うことを素直に聞いてラビに謝った。

「まったくお気楽な奴らだな。」

神田がぼそっとつぶやいた言葉がシュレイアに聞こえた。

「神田はどうしてそんな態度をとるのですか？」

「あんたに関係ない。どんな態度をとろうが俺の勝手だろ。」
そう言って神田はアレン達の前から去っていった。
「私余計な事したかな…」
「シュレイア元気出して〜。」
カファはシュレイアの傍に行き、シュレイアを励ました。
「カファ、私なら平気だよ。」
「僕達も早くコムイさんに任務の報告しましょう。」
ー室長室ー
「みんなお帰り。任務お疲れ様。」
「ただいま兄さん。任務の報告で無事に任務完了したよ。華は入手したんだけど…」
リナリーはコムイに華の事で報告するのにどう説明したらいいのか困っていた所へカファがコムイの所に飛び出した。
「初めまして、僕カファ。よろしくな〜。」
「なんだい。これぬいぐるみかい!?」
「兄さんこれが任務の華よ。どうしてなのか華から喋るぬいぐるみに変わったみたいなの。」

「華からねぇ…。」

コムイはじーとカファを見ていた。

「そんなに見られると僕恥ずかいよ〜。」

「ごめんね。僕もこんな事初めてだからついつい。」

コムイはカファの存在が果たしてどういう事なのかコムイ自身全く解らなかった。何故華からカファというものが生まれたのかを…。

「コムイさん、カファはどうなるんですか？」

コムイは今回の任務で華の回収という事で華は現在はカファというぬいぐるみに変わってしまっているためどうするのかシュレイアは気になっていた。

「うーん。華がイノセンスかどうか確認出来たし、僕はもういいよ。シュレイアがどうするのか決めたらどうだい？」

「僕はシュレイアと一緒にいる〜。」

「カファ。私、カファと一緒にいます。」

「わぁ〜い。シュレイア大好き〜！！」

カファはシュレイアに寄ってきてスリスリと顔に擦りつけた。その姿を見ていたラビはカファが羨ましいと思ってずっと見ていた。

ｅｐｉｓｏｄｅ．５（後書き）

今回はラビと神田が登場しましたがいかがでしたか？
この２人をどう出そうかかなり悩みましたけど、なんとか完成しました…。
次の話はどういうなるのでしょうか？

ｅｐｉｓｏｄｅ．６へ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2531w/

D.Gray-man～The power that is hidden～

2011年11月29日00時56分発行